

『あなほりデンデン』

上 本 創

「ひえ~~~~~！ そいつはすごい。」

思わず後にのけぞったデンデンは、イスからころげおちそうになるのを、やっとのことでこらえました。そして、ゴックン、なまつぶをのむと、こんどはアカデミーの鼻にかぶりつかんばかり、身をのりだしてまくしたてます。

「き、き、金ですか、銀ですか、まさかダイヤモンドでは……。いやいや、この世の中で、いちばん価値のあるものだから、もっともっとすごいものが、この村のどこかに眠っているわけですね。すばらしい！ 実にすばらしい発見だ。」
アカデミーは、デンデンをなだめてイスにもどすと、ハンカチでかるく顔をふきました。

「つばがとぶのだよデンデンくん。まあそうあわてずに少しおちつきたまえ。夜は長いし、まだお酒もたっぷりあるようだ。ゆっくりと話をうではないか。」

アカデミーは、テーブルに出されたマタタビのお酒を口に運ぶと、ピチャピチャ音をたてて味悪い、まんぞく顔で舌なめ

ずりをしました。

「アカデミー大先生さま、どうぞ。」

デンデンは耳とひげをピクンピクンさせながら、ギンギラまなこでアカデミーにすりよると、からっぽになったコップへトロリトクトクお酒をつぎます。

「ねえ大先生。そのオ……お宝の話ですがね、いったいこの村のどのあたりに眠っているんでしょうねェ……。教えてほしいな~~~~~。ききたいな~~~~~。」

「ほう、ききたいかね。しかしデンデンくん、さっきのきみは、つめたかったなあ……。ひさしぶりでたずねて来たというのに、おいかえそうとするんだものなあ……。」

デンデンは、グッと言葉につまり、心の中で「しまった」と思いました。

山ネコのデンデンは、その夜つかう最後のマキを、だんろにくべて、ねごちのよいベッドのじゅんびをしていました。外はあいかわらずの吹雪です。マキがだんろでパチパチとはじけ、ゆらゆらと火の粉をおどらせていました。デンデンはねどこで、とっときのマタタビのお酒のもうと考えていました。

今日も一日、くたびれもうけ。雪の野山をかけまわっても、野ネズミーびぎ、山バト一わ、とらえることはできなかったのです。

山ネコ大学のアカデミーが、たずねてきたのはそんな時で

す。デンデンはあたたかなベッドで背中をまるめ、マタタビのお酒をチビリチビリとなめているところでした。

「だれだいこんな夜ふけに……。」

デンデンはすこぶる気げんの悪い声をだして、めいわくそうに、たたかれているドアの方を見ました。

「わたしだ、アカデミーだよ。ここをあけてくれないか、外はさむくて、身も心もこおりつきそうだ。」

デンデンは少し考えていいました。

「そんなら自分の家で、おとなしくねてればいいじゃないか。」

「なにをいうのだねデンデンくん。こんな夜は、ひとりより二人。ホコホコもえるだんろを前に、お酒がのみたいではないか。わたしは、かわいい教え子のきみが、さみしい思いをしているのではないかと思つたからこそ、遠い雪道をこうしてたずねてきてあげたのだよ。」

アカデミーはドアの外、ふるえる声でいいました。デンデンは、マタタビのお酒が入ったつぼと、のみかけのコップを、ベッドの下にかくすと、しかたなくドアの方へあゆみよります。でも、すぐにはひらかず、またそこで考えました。

アカデミーは、この村で、デンデンと貧しさの一位二位をきそう山ネコです。山ネコ大学の先生などといえ、きこえはいいのですが、たいしたこと教えないくせに、えらそうにだけはするものだから、人気がなく、大学がひらかれてい

らい、三びきしか生徒を教えたことがありませんでした。アカデミーは、マキを買うお金もなく、さいきんでは、村の数少ない教え子の家を、てんととまわつて、食べ物をねだつたりしているとききます。アカデミーの山ネコ大学にかよつた生徒というのは、どういうわけか、みんな貧しいくらしをしていました。それでも、今のアカデミーよりは、ずっとましかもれません。

「あんたにあげる食べ物なんかうちにはないよ。このぼくでさえ、今日は何も食べちゃいないんだ。よそへ行つたらどうですか？」

デンデンがいうと、アカデミーは急に声のちようしをかえしました。

「どんなことがあろうとも、変わらないものがある。それは愛だよデンデンくん……。きみはわたしの教え子で、わたしはきみの先生だ。大学をそつぎようしても、この親子のような愛情は変わらない。ちがうかねデンデンくん。今夜、わたしがたずねてきたのは、けつしてきみに何かをめぐんでもらおうというわけではない。きみのくらしが貧しいのはよく知っているよ。」

アカデミーは、しんみりとそういった後、少しだまってから、こんどはうつてかわつて明るい声でつづけるのでした。

「今夜は耳よりの話を持ってきた。ものすごくいい話だ。部屋に入れてくれたら話してあげよう。きみはわたしを見な

「おすだろう。」

デンデンがほんのちょっとドアをひらくと、アカデミーはすかさず中へ入ってきました。雪をまきこんで部屋に入ると、デンデンの手をつよくにぎりしめ、アカデミーは鼻水をすすりました。

「わかってくれたのだねデンデンくん。さすがかわいい教え子だ。いいだろう、きみにだけ、こっそりと教えてあげようものす~~~~~いい話だよ。まず、きみがとつときに行っているマタバビのお酒を出したまえ。今夜は大いにのみかたりあかそうではないか。」

たしかさつきは、ドアの外と中とでこんなやりとりがあったのでした。

「まあまあまあ、お酒をもう一ぱいいかがですか。さきほどのごぶれいは水にながしてくださいよ大先生。」

「ふむ、いたどころ。」

酒ずきのアカデミーは、すぐに気をよくしました。おまけに大先生、大先生といわれるものですから、すっかりとくい顔で、鼻のあなをピクピクふくらませています。

「大先生。いったいどこに、どのようなお宝がねむっているんですか？」

デンデンは、アカデミーのきげんをとりながら、なんどもなんどもたずねました。

「それはだねえ……いや、まてまて、もうすこしのもう。」

デンデンがとつときに行っていたマタバビのお酒を、ほとんどうたいらげてしまうと、アカデミーはようやく話しはじめました。いつのまにか吹雪はおさまり、窓の外からは月あかりがもてきます。白銀の野山はその光をうけて、ま昼のような明るさでした。

「それはだねえデンデンくん。とにかくあなをほることからはじまるのだよ。」

アカデミーは、上目づかいにデンデンの顔色をうかがいました。そして、コップにのこった最後のお酒を、グビリッとのみほすのです。

「え？　とにかくあなをほることからはじまるとは、どういうみでしょうか。」

アカデミーは、ここではじめて、一まいの地図をテーブルの上にひろげました。デンデンの村の地図です。山にかこまれた小さな村。デンデンの家も、アカデミーの家も、その中に描かれていました。そして、村のちょうど中ほど、赤くペケじるしでしるされた所を、アカデミーは指さしたのです。

「もんだいの場所はここだ。」

デンデンはグッと顔を近づけると、その場所をにらみつけて大きくうなずきました。

「わかりました。このペケのところをほればお宝がでくるわけですね。わかりますとも、ここをほらなければお宝は見

つからない。とにかくあなをほるとはそういういみでしよう。」

「ま、まあそんなところだ。けれども一つだけ注意しなければならぬことがある。あなは、きみの家のゆか下からほりはじめて、もんだいの場所までたどりつくのだよ。」

アカデミーは、デンデンの家とペケじるしの場所を、地図の上で、一直線にむすびました。

「いいかね、まがってはいけない。まっすぐにこの場所までほりすすむのだよ。」

アカデミーはよっぱらってフララ、フララしながら、かえりしたくをはじめました。

「村のみんなに気づかれないためだ。わかるねえデンデンくん。」

アカデミーは、そういいのこすと、デンデンの家をあとししました。デンデンの宝さがしがはじまったのは、つぎの日の朝からです。

デンデンは、いわれたとおり、自分の家のゆか下から、あなをほりはじめました。最初はたてに、自分の背だけほどの深さほり、つぎはまよこに、はるかなるペケじるしを目ざして。あなをほるのは大へんな仕事でした。けれども、お宝が見つかった時には、そんなくろうなどいっぺんにふきとんでしまうでしょう。

「ザックリ、ザックリお宝めさせ。ゴッソリ、ゴッソリま

るもうけ。赤土、黒土、かたい岩。まっすぐまっすぐほりすすめ。”

——お宝が見つかったら、先生にもお礼をさしあげなくちゃいけないなあ。大学の時の友達はどうしたろう。あいつらにも少しめぐんでやろう。——

デンデンはすっかりお金持ちになった気でいました。

「お~~~~い、デンデンくん、やっているかね。」

「は~~~~い、がんばっていますよ。もうだいぶ近づいてきたはずです。」

あなをほりだして一週間。アカデミーがよろすを見にやってきました。

「ふ~~~~む。」

アカデミーは持ってきた機械をとり出して、デンデンのほったあながまっすぐかどうかをしらべます。

「もう少し右だ！ わずかにくるっている。せいかくにほらないとお宝は見つからないのだよ。」

「ザックリ、ザックリお宝めさせ。ドッサリ、ドッサリお金もち。どんな宝が出てくるか。やれほれ、それほれ、まっすぐ」

デンデンのあなは、かくじつに目的の場所めざしてのびていきます。今日か明日には、ペケじるしのところまでとどくだらうとアカデミーはいいました。そして、お祝いをするからお酒をかっておくようにとつけ加え、すがたを消したので

す。デンデンの前にあつた土のカベが消えたのも、その日のうちのことでした。

ドサッノ　とくずれた土のかべ、急にひらけた左と右にたたずむ二ひきの山ネコがおりました。どこまでもつづく左右のあなは、まちがいなくこの二ひきがほりすすんできたものです。デンデンは、いっしゅん、何がおきたのかわかりませんでした。とつぜん目の前にあらわれた二ひきも、それぞれに首をひねっています。三びきは、くらいあなの中で、目を見はりました。

「やや、お、おまえはノ」

「な、なんと大学のときのノ」

「ど、どうなっているんだこれはノ」

それぞれが手にした同じ地図。今、三びきのいるところが、ちょうどベケじるしの場所でした。そして最後に……。

ドサッとくずれたのはてんじょうの土でした。まさにぽっかりあいたあな一つ。まばゆい日の光の中から、アカデミーがふつてきました。

「やあ、やあ、やあ、みんなよくがんばってくれた。みんなの友情が、このトンネルをかんせいさせた。友達こそ、何ものにもかえられない宝というものだ。すばらしい、じつにすばらしい。」

三びきはボンヤリと、アカデミーを見つめるばかりです。

「みんな持ってきたかね、デンデンくん、きみは酒だったは

ずだよ。」

ふと気がつくと、ほかの二ひきは、山バトと野ネズミを持っています。アカデミーはにこやかにうなずくと、声をはずませていいました。

「さあ、同窓会をはじめよう。」

おわり

(うえもと　はじめ　昭和五十七年国文学科卒業生)

枇杷偶感

山田　勇

私は果物を写生するのが好きである。昨今いろいろの外国の果物も出廻り、形も色も異国の芳香を漂よわせている。その果物がテーブルに直にのっているだけのものも飾り気なく美しい。

鉢に入れたり、そえたりするのもその興趣が増してくる。清水焼の清潔な呉須の鉢に、濃い赤いリンゴも美しいが、パキスタンなどの楽焼風の器にマンゴーや黒いキウイなど入れるのも楽しい。

部厚い大きな葉、濃い緑の葉に囲まれて木になっている枇杷を壺に入れた。粉が吹いたような白っぽい橙となった実は、東洋の夜明けのような清々しい香を放ち、わたしたちに暖かい気持ちを起こさせてくれる。木の葉と共にあっている枇杷は鉢に入れた実のみのものもとちがった野性的な自然の美しさがある。(やまだ　いさむ　文学部専任講師)